

優秀賞

おにぎり

神奈川県 秦野市立渋沢小学校六年 住谷 祐輔

六年生になって、僕は少し焦っていた。最
高学年。委員長。いろんな事が一年生。妹にやっ
てくる。何より、今年から妹が一年生。妹に下
手な姿は見せたくない。しっかりしなくちゃ
と気持ちばかりが焦る。昨年と同じリズムの
はずなのに、何処か疲れていた。

母さんはそんな僕を気にして、僕と父さん
二人分の野球のチケットをくれた。五月二十
六日(月)巨人戦、東京ドーム。野球観戦は好
きだけど、正直、気乗りしなかった。月曜日
じゃ、次の日学校だし、急いで学校から帰っ
て行っても試合開始には間に合わない。父さ
んが仕事を休んで行くとも思えないし、前
も行こうと誘っておいてドタキャン、なんて
事もあった。だから、あまりうれしくはな
かった。

試合当日、父さんは仕事を休んだ。学校か
ら帰ってすぐに行ける様にと新幹線のチケッ
トを手配し、僕が帰ってくるのを今か今かと
待っていたらしい。予定より遅れて帰宅した
僕に

「おにぎりと玉子焼き、作ったぞ。」

どうれしそうに話す父さん。急いで出発した。

電車の中、急に父さんが慌てた顔をした。
どうやら、おにぎりや玉子焼きを途中の車
中に置いてきたらしい。ひどく落ち込む父
さん。何だかわいそうに思えて、

「戻ろうか。」

と声を掛けた。でも父さんは、

「前の試合見せてあげられなかったな。だ
か
らいいよ。」

と言って苦笑いをした。覚えていてくれた
んだ、どうれしくなった。結局、コンビニで

おにぎりとお菓子を買って試合会場に向か
た。

試合が始まると、父さんはまるで子供のよ
うにはしゃいだ。応援したり、野球の話をし
れしそうに話す父さん。普段、コーチをして
いる時、家に居る時とは違う顔をしている。

その顔を見ていたら、ふと父さんの手が目
に映った。慣れない手で握ったんだろうな。
すごい顔して炊飯器と格闘してたんだろうな。
と思うと、何だか父さんがかわいく思えた。
その手を何度か見ているうちに、気持ちが軽
くなって試合が楽しくなっていた。

帰りの電車の中で、

「作ってくれたおにぎり食べようね。」

と声を掛けた。父さんは

「心配だからにおいをかいでから食べよう
ね。」

と笑った。でも、ちょっとうれしそうで、僕
もうれしかった。

車に戻って、急いでおにぎりにおいをか
いだ。父さんが

「大丈夫そう。」

と僕に渡した。そのおにぎりは、爆弾の様な
大きさでごつごつしていた。玉子焼きも母さ
んのととは違って平べったくなってやけに大き
い。だけど、今まで食べたおにぎりの中で、一番
美味しくて、一番あったかい味がした。

家に帰ると、母さんが起きて待っていてく
れた。ちょっとしか離れていないのに、家の
空気は懐かしく、妹の寝顔はかわいかった。
家族っていいなと心から、そう思った。

その日は、夕々にいい夢が見れた。